

リズミカルランド建設計画用地内埋蔵文化財発掘(試掘)調査報告書

島崎遺跡

1994年3月

長野県下高井郡
山ノ内町教育委員会

序

島崎遺跡は横湯川と角間川に挟まれた沓野台地に位置し、竜神社を源とする豊かな清流に恵まれた水田地帯であります。現在も正面に信仰深い高社山、遠くには北信五岳が一望できる大変眺望のよいところであります。

横湯川、角間川、また、周囲の山々を控え縄文人の生活には、豊富な漁獲、狩猟に恵まれた格好の場であったことと思います。

さて、町ではこの地に、懸案でありましたリズミカルランド建設構想計画がいよいよ具体化し、このたび計画図面が提示されました。

しかし、島崎遺跡は重要な遺跡であるということから教育委員会は、慎重に対処し、町文化財保護審議会の意見を求め、更に県文化課のご指導をいただき発掘調査が実施できるに至った次第です。調査は、寒さ厳しい12月1日から8日までの間に行われました。

この調査にご協力いただき調査報告書をまとめていただきました金井汲次先生を団長とする調査団各位をはじめ、調査実施にあたりあらゆる面でご理解ご協力を願った皆様方に感謝申し上げ、深甚なる敬意を表して序文といたします。

平成6年3月

山ノ内町教育委員会

教育長 小布施竹男

例　　言

- 1 本書は長野県下高井郡山ノ内町大字平穂（沓野）字横道西の横湯川と角間川に挟まれた台地、通称島崎の島崎遺跡の遺跡範囲確認発掘（試掘）調査の報告書である。
- 2 発掘調査の原因は山ノ内町が計画するリズミカルランド第一次計画に基づくもので、面積7.2ha（内訳1、駐車場15,000m²、2、クワハウス等温泉関係施設6,000m²、3、植栽7,500m²、4、マレットゴルフ場等広場12,000m²、5、通路4,000m²、6、緑地27,500m²）の開発に伴うものである。
- 3 土地所有者は山ノ内町大字平穂1,187黒岩市兵衛ほかで、工事終了時期は平成7年度を予定している。
- 4 発掘（試掘）調査は山ノ内町商工観光課の委託をうけて、山ノ内町教育委員会が調査主体者となって、平成3年12月1日から8日まで行った。
- 5 調査の整理作業は、中野市歴史民俗資料館で平成6年1月から3月の間に図版整理 池田実男／湯本栄一／檀原みち江／池田正子／池田きよ子が行いトレース作業は山崎のり子が行った。
- 6 本報告は小林貞信と檀原長則が行い、写真撮影は檀原が行った。
- 7 出土遺物及び図版などは、山ノ内町教育委員会で保管している。

本文目次

序	
例　　言	
1 発掘（試掘）調査に至る経過	3
2 位置と景観	4
第1図 山ノ内町の主要遺跡位置図	
3 遺跡の学史	6
第2図 リズミカルランド計画概要図	
4 調　　査　　日　　誌	8
5 調査方法と結果	9
第3図 試掘調査地点位置図／第4図 土層断面図	
第1表 島崎遺跡試掘地点遺物検出手表／第5図 鉄釘実測図	
6 考　　察	13
第6図 土器拓影図／第2表 島崎遺跡出土土器（拓影図）観察表	
7 む　　す　　び	16
写　　真　　図　　版	17

1 発掘（試掘）調査に至る経過

島崎遺跡は、昭和26年耕地整理が行われた際に多量の土器、石器が出土して注目され、埋蔵文化財包蔵地として確認された。この辺は横湯川と角間川に挟まれて上林方面から舌状に長く突き出た台地上にあり眺望の良いところである。昭和63年に町の活性化を図る目的と町民の生涯学習の場としてのリズミカルランド建設構想が計画された。その後、約5年間の検討期間を経て漸く実行に移る段階となった。この事業の主管である町観光商工課から平成5年4月に教育委員会事務局にこの計画図が提示された。島崎遺跡は縄文時代中期の重要な遺跡であるが、現在の低迷している観光地としての活性化等を勘案するとこの開発行為はやむを得ないものと判断された。

そこで、県教委文化課、町文化財保護審議委員と事前協議を行い、平成5年9月17日付で文化庁長官宛埋蔵文化財発掘調査の通知書を提出した。発掘担当者に日本考古学協会員・山ノ内町文化財保護審議委員の金井汲次氏に依頼し12月1日から発掘調査（試掘）を開始した。

調査団の構成

調査責任者	小布施竹男	山ノ内町教育委員会教育長
顧問	金井喜久一郎	山ノ内町文化財保護審議会会长
団長	金井汲次	日本考古学協会員 山ノ内町文化財保護審議委員
調査員	檀原長則	日本考古学協会員
調査補助員	池田実男	長野県考古学会会員 湯本栄一 樋口義政 池田正子 檀原みち江 池田きよ子
事務局	山ノ内町教育委員会事務局	柄沢清太郎 事務局長 小林貞信 社会教育係長 小林国男 体育係

2 位置と景観

山ノ内町は面積266km²をもち、その大半は上信越国立公園の志賀高原の山岳地帯で、沓野はこの山元の集落である。群馬県草津町との物資の交流は、近世の草津道の頻繁な往来は、鳥居峠越えの大街道との公認された街道と競合となって現れている。

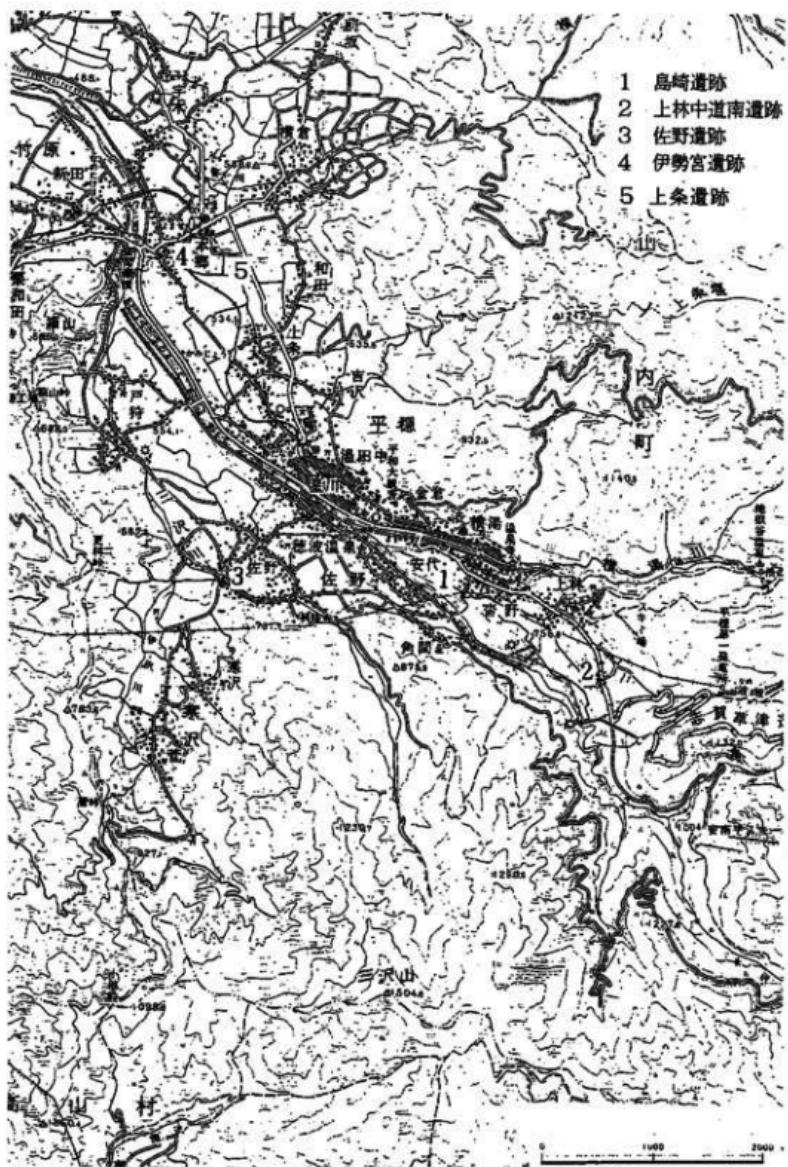
また、沓野は広大な山林資源をもち山稼ぎの物資の補給の基地でもあった。

この志賀高原には三つの河川があり、横手山(2,304.9m)方面を源流とする硯川・角間川と、赤石山(2,108.6m)大沼池を源流とする横湯川は、合流して夜間瀬川となり、中野市で千曲川に合流している。岩菅山(2,295m)方面に発する雑魚川は北流して魚野川に合流している。

この西流する横湯川と角間川は、志賀高原の山間地をでて、山ノ内盆地面にいたるや、下刻作用によって、深い河岸段丘をつくっている。この合流地点の三角状の台地が、今回試掘調査した島崎遺跡である。このようにこの遺跡は、南北は河岸の崖に囲まれ、やや緩傾斜のみられる北面に草津道、現在の国道292号線が通じており、中世の集落は竜宮川の流れに沿ったこの地にあり、諏訪社の跡が残されている。

この遺跡にたてば東方は沓野集落から志賀高原の山々とつづき、南北は川をへだてて、僅かな平地をもって山が聳えている。西方は山ノ内盆地から箱山などの低い山並みを越して、妙高山をはじめとした、北信五岳の山々が連なっている。

このような位置から同じ沓野の上林中道南遺跡(1984年調査)に見られたように、群馬県から新潟県方面の影響が、顕著にみられ、山ノ内町の原始時代の文化を知る上に欠かすことのできない遺跡と考えられる。



第1図 山ノ内町の主要遺跡位置図

3 遺跡の学史

島崎遺跡の最初に文献に現れるのは、大正11(1922)年発刊の『下高井郡誌』である。これにはここから出土した石器(石鎌大小・黒岩市兵衛氏所有)が記載され、土器類は報告されていない。

昭和28(1953)年、下高井教育会から委嘱されて、この地方の考古学調査に従事された小野勝年は報告書『下高井』で、黒岩宅に保管されていた土・石器をみて、縄文中期の阿玉台式、加曾利E式を中心とした土器・石鎌・石斧が発見される山ノ内地方の大遺跡と記されている。

昭和48(1973)年発刊の『山ノ内町誌』では、それをうけて阿玉台・勝板式から中心は、加曾利E式で、完形品は発見されていない。石器は小形磨製石斧・打製石斧・石錐・石鎌・石匙・石棒などが出土し、打石斧は短骨型のものが多く、なかには中くびれのものもある。農道改修の時、多量の遺物が出土したので、「遺跡の範囲は大きいものと推定される」と記されている。

昭和56(1981)年発刊の『長野県史・考古資料編・遺跡地名表』では、遺跡名・島崎遺跡・所在地・平穏・横道西・台地と記され、前記の遺物の出土が記載されている。

昭和59(1984)年この遺跡東方1,800mの山麓にある上林中道南遺跡が闇場整備のため、緊急発掘調査を行った(山ノ内町教育委員会『上林中道南遺跡』1985)。

この結果、縄文時代早前期の土器や石器と、コの字形の石囲い戸をもつ住居址1を検出している。

今回の試掘調査は、1998年の長野オリンピック開催を控え、地域の活性化を図るために、山ノ内町が計画したリズミカルランド計画に基づくもので、広範に調査点を設けて試掘調査を行ったものである。



第2図 リズミカルランド計画概要図

4 調査日誌

1993年

- 11月26日 山ノ内町教育委員会において試掘調査の事前打ち合わせを行い、現地視察。
- 12月1日 テント設営 試掘開始、1m×1mの大きさで、上段の水田地帯より手掘りで始める。
ここは明治年間の坪根堰の開削以降に水田化されたところである。
- 2日 調査続行、台地の先端部分から下段の電宮川の周辺にうつる。
- 3日 手掘りと、バックホーで下段の水田地帯の試掘を幅1mのトレーナ方式で行う。川沿いに縄文と平安時代の遺跡があったことが分かる。
- 6日 調査続行と埋め戻し作業、現地調査終了。
- 7日 教育委員会で調査結果の整理を行う。
- 8日 試掘調査結果について、県教委百瀬新治指導主事による、埋蔵文化財保護協議を行う。
出席者 金井喜久一郎、金井汲次、檀原長則、湯本正雄、小林貞信係長。試掘調査の
結果を尊重して、なるべく遺跡を破壊しない方向で施設の計画を立案する。破壊され
る部分は再協議して方向づけを行うなどの指導があった。

1994年

- 2月11日 以降遺物整理、報告書の作成作業を行う。

5 調査方法と結果

リズミカルランド第一次計画地に1mの大きさの試掘地点を70箇所設定し、地山層(黄土)まで掘り下げて行った。ほとんど地目は水田で、傾斜地のため、造成で削平されているため、一枚に区画された水田の中心を選んで、調査地点を設定した。また選定地点は、地権者の承諾の関係から均等を欠いている所がある。

このうち、何らかの遺物の発見された箇所は16地点で、台地上では2箇所の発見で土器片も1片づつで、黒土層の1mと深い地点もみられるが、遺物は希薄であった。この台地面は坪根堰開削以後の開田地帯である。

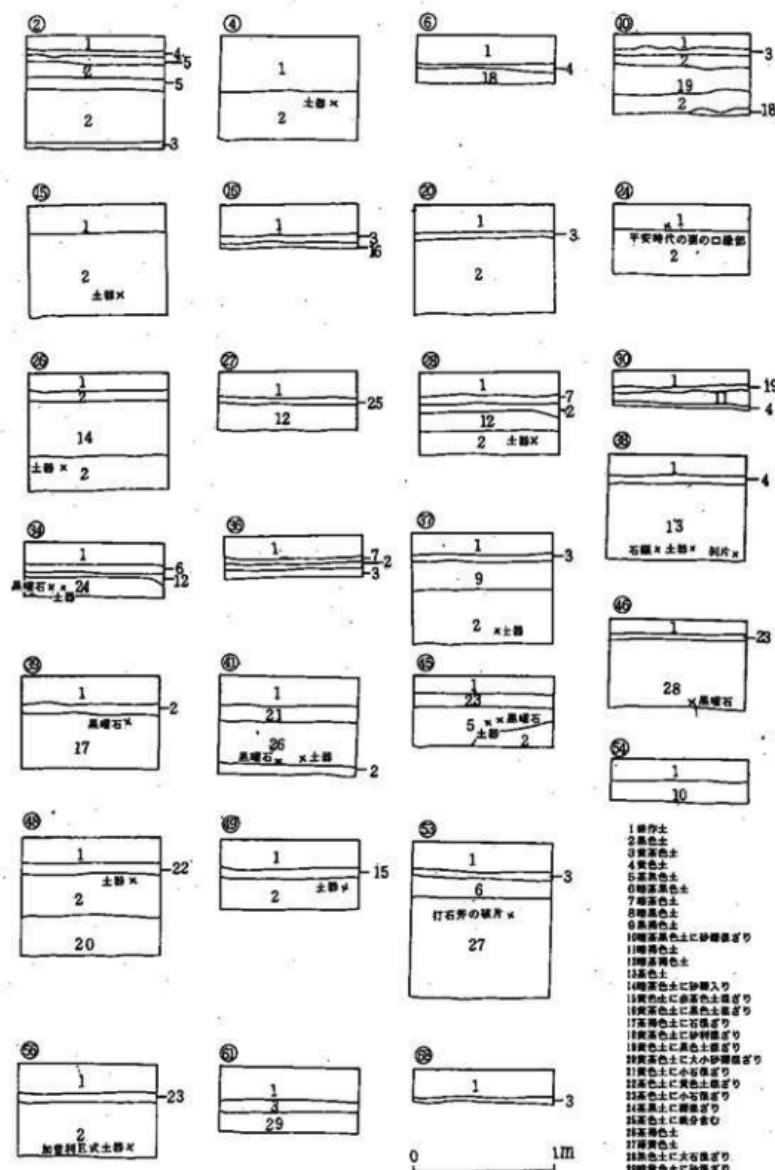
遺物の集中して検出されたのは、先の台地の北の一段下がった所で、竜宮川の両側である。ここには黒岩市兵衛氏所有の烟があり、ここから加曾利E式の土器、2片を採集した。

さらに⑩地点からは平安時代の甕破片が検出され、⑫地点からは縄文早期から前期の土器が検出され、⑭～⑯の地点では中期後葉の加曾利E式の土器が集中して発見された。ここは早くから水田化されたところで、耕作土以下は石碑が多く遺跡は、1m前後と深く、川の氾濫が認められた所もあった。

なほ、諏訪社跡は事業予定地から除外されている。



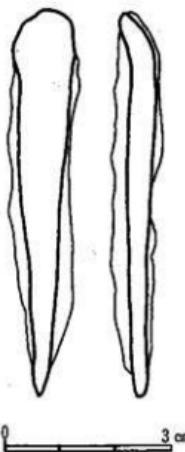
第3図 試験調査地点位置図



第4図 土層断面図

第1表 島崎遺跡試掘地点遺物検出表

出土地点	縄文土器	黒曜石	剝片	土師器	鉄器	備考
4	1					加曾利E式
15	1					
20	1					関山式
24	1			1		#
26					1	
28	2					早期末・関山式
34	6	1				加曾利E式
37	4					関山式
38	19					加曾利E式
39			1			
41	12					#
45	5					#
46		1				
48	1					#
49	5					#
53			1			
56	3					#
計	61	2	2	1	1	



第5図 鉄針実測図

6 考 察

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代の土器片73、平安時代の土器片1、黒曜石などの石器材剥片6、鉄片1などであった。このうち縄文早期絞条体圧痕文系土器と条痕文系土器（第6図以下同じ1・2）は、この上流の上林中道南遺跡からも出土している（山ノ内教委『上林中道南遺跡』1985）。これらには胎土に繊維痕がみられ、条痕文系土器は器面を具焼状の工具で整形した痕跡を残している。これらの土器群は鶴ヶ島台式土器などとともに出土し、木島平村三枚原遺跡（木島平教委『三枚原遺跡』1977）、上林中道南遺跡など類例は県下に亘っている。

前期の土器（3～9）は、羽状縄文の土器がほとんどで、胎土に繊維痕がみとめられないのは、4・9である。その他5・6・7・8の土器は繊維痕があり、前期Ⅰ期の土器（『長野県史』）で、閑山式土器である。この土器も関東地方と類似する点が多いのは、利根川上流が三国山脈に源流すること、これに接する当地方の地理的環境に、由来するものであろう。

中期後半の土器（10～35）は、加曾利E2～3式土器で、『県史』では中期後葉Ⅲ期の土器が中心である。沈割やワラビ状の巻き込みのある凹帯（10）や、隆帯のあるもの、H状などの隆帯間の縄文を、縁に添って磨り消す手法（22）など、この時期の特徴をよく現している。

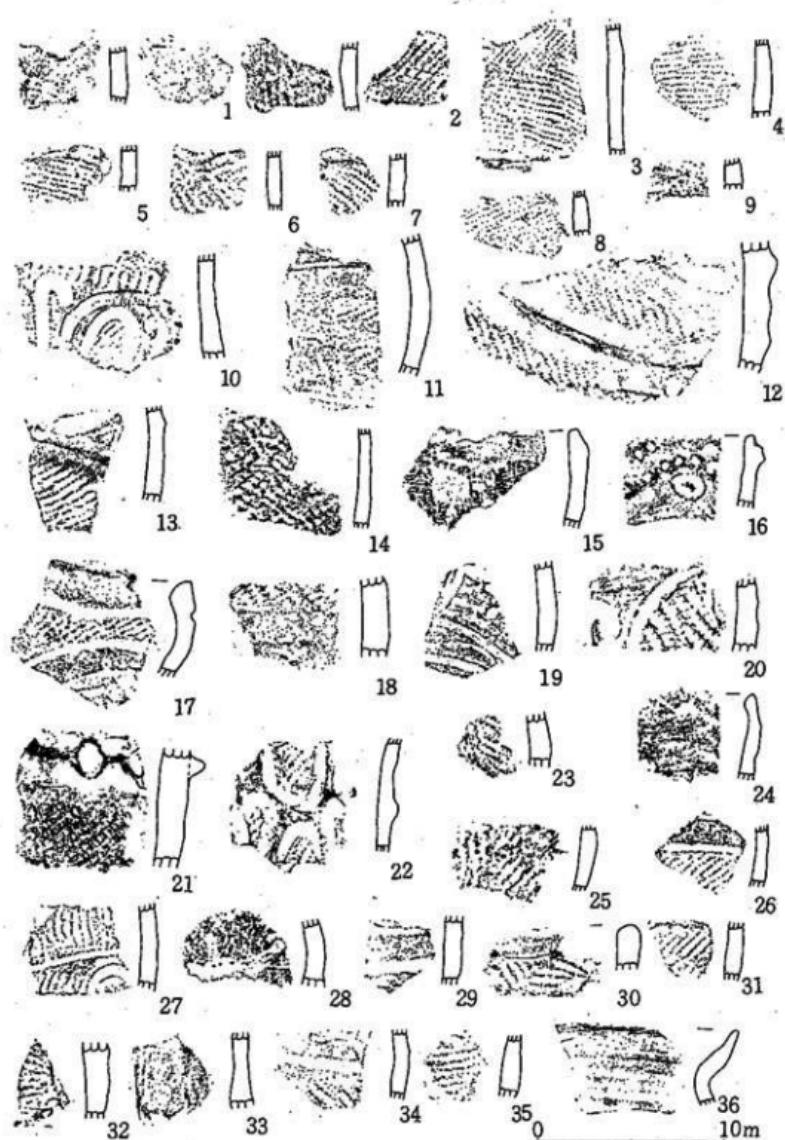
縄文は、大型の土器には太い縄目のものが使われており、粗い繊維のものが多い。中には撚糸と思われるものがある（13）。

町内の上条遺跡から出土した土器は、同4式土器で幅広い磨り消し部があり、胴部のくびれた器形である。この時代の遺跡は小規模で、点在していることが特徴である。

平安時代の甕（36）はV期（國分期）のもので、ロクロ整形された甕の口縁が内湾しながら立ち上がる器形で、平安時代も終わりに近いものである。これは先の上林中道南遺跡からも発見されしており、この台地の開拓の歴史を刻む証拠となろう。

鉄釘（第5図）も同時代のものと推定される。

各時代を通して竜宮川のほとりに遺跡が所在することが判明した。これは人間の生活が水と密接な関係にあることを示している。



第6図 土器拓影図

第2表 島崎遺跡出土土器(拓影図)観察表

番号	出土地点	時期	文様	器形	色調		成型	形態の特徴	備考
					外面	内面			
1	28	縄文早期	条痕文	深鉢	暗橙色	茶褐色	織維痕あり		
2	28	"	格子体压痕文	"	"	"	"		
3	20	前期	羽状縄文	"	暗褐色	暗褐色	"		開山式
4	24	"	縄文	"	暗橙色	"			
5	28	"	"	"	"	"	織維痕あり		開山式
6	28	"	羽状縄文	"	"	"	"		"
7	38	"	縄文	"	"	褐色	"		"
8	28	"	羽状縄文	"	"	暗褐色	"		"
9	37	7と同体							
10	56	中期	列点文 縄文	"	明黄褐色	暗褐色			加曾利E式
11	41	"	"	"	赤褐色	"			"
12	45	"	"	"	黃褐色	黃褐色		大型	"
13	41	"	撚糸文	"	暗褐色	赤褐色			"
14	"	"	縄文	"	黃褐色	黃褐色			"
15	"	"	"	"	赤褐色	赤褐色		口縁部	"
16	"	"	列点文 凹蓄文	"	"	"		"	"
17	49	"	"	"	暗褐色	黃褐色		"	"
18	34	"	縄文	"	赤褐色	"			"
19	"	"	凹蓄文	"	黃褐色	赤褐色			"
20	45	"	"	"	"	暗褐色			"
21	45	"	陰帯・縄文	"	"	"			"
22	41	"	"	"	暗黄色	"			"
23	表 採	"	縄文	"	赤褐色	"			"
24	"	"	沈文文	"	"	黃褐色			"
25	48	"	縄文	"	暗褐色	暗褐色		口縁部	"
26	41	"	"	"	黃褐色	暗褐色			"
27	"	"	II - 凹帯	"	暗褐色	"			"
28	38	"	"	"	明黄色	明褐色		口縁部	"
29	34	"	凹 帯	"	暗赤色	暗褐色			"
30	"	"	縄文	"	"	"		口縁部	"
31	41	"	"	"	赤褐色	赤褐色			"
32	4	"	"	"	"	黃褐色			"
33	34	"	"	"	"	赤褐色			"
34	"	"	II 四帯	"	"	黃褐色			"
35	37	"	"	"	暗褐色	暗褐色			"
36	24	平 安		甕	暗黄色	暗黄色	クロ整形	口縁部	

7 むすび

今回の遺跡範囲確認発掘調査によって島崎遺跡の遺構・遺物の分布状態が一部を残してほぼ判明した。この遺跡は上林中道南遺跡と同じく、縄文時代早期から始まり、弥生・古墳時代の一時期を除いた、主に縄文時代中期を中心とした遺跡であることが解明された。過去の同時期の遺物の出土状態から、山ノ内町では注目される大遺跡で、今後とも保護対策には万全を期したい遺跡である。

調査の結果として、幸い建物施設の計画されている所は、坪根堀開削以降に開田された所で、遺物の検出が少なかったが、地権者の都合で、発掘調査に入れない箇所もあったため、工事施工に当たっては遺跡破壊のないよう、期したいものである。

また、この計画範囲内にある諏訪社跡の存在により、この周辺から中世の住居遺構などの存在も考えられ、水田化されているとはいえ、注意が必要である。

今回の発掘調査と報告書の作成には、町教育委員会をはじめ、地権者のご理解とその折衝に当られた湯本正雄氏、ご指導いただいた県教育委員会指導主事百瀬新治氏、町文化財保護審議金会長金井喜久一郎氏などのご努力によって、ささやかであるが、本報告書が発刊されることに至ったことに感謝します。

(檍原長則)

写真図版

金倉から見
た島崎遺跡
(中央の白
い部分)



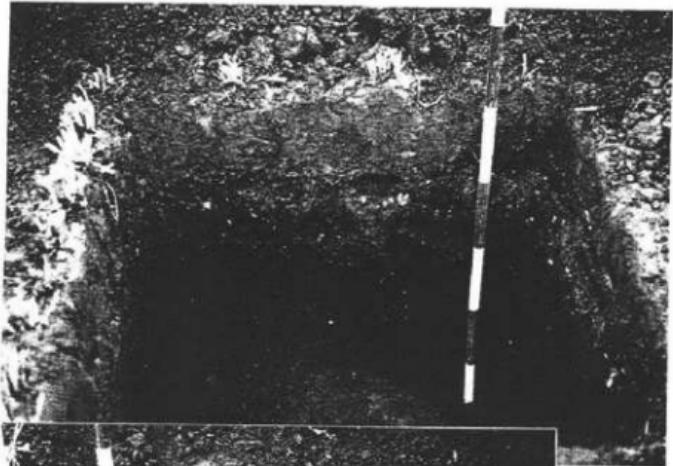
島崎遺跡か
ら北信五岳
を望む



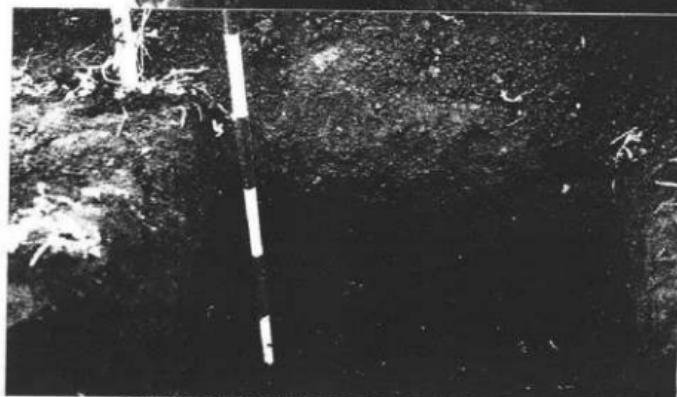
南から見た
遺跡北（台
地下・竜宮
川沿）



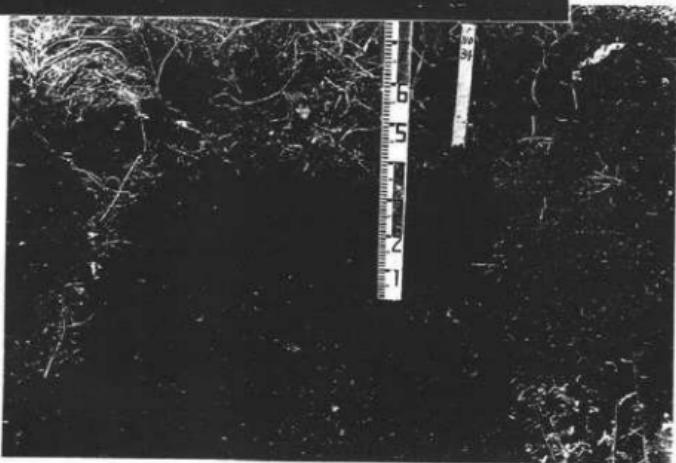
試掘坑
No.3



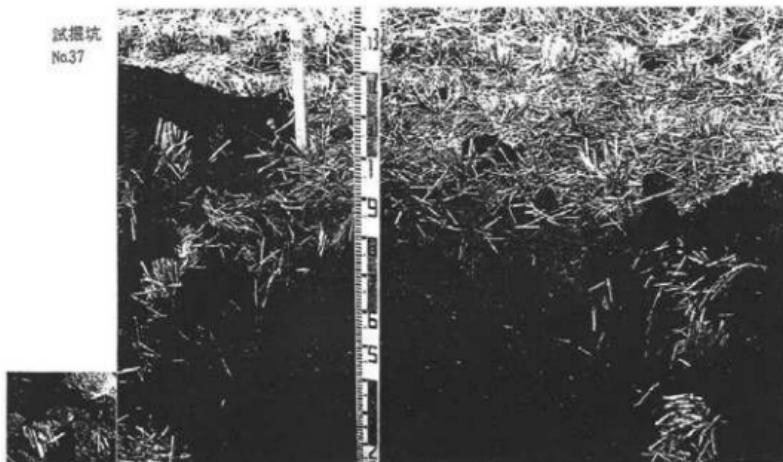
試掘坑
No.4



試掘坑
No.34



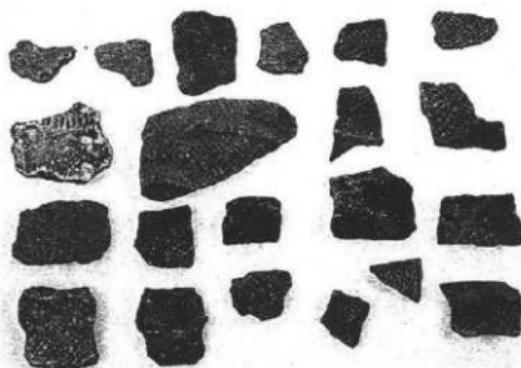
試掘坑
No.37



試掘坑
No.56



出土した土器



鳥崎遺跡

リズミカルランド建設計画用地内
埋蔵文化財発掘(試掘)調査報告書

発行日 平成6年3月

発行者 長野県下高井郡山ノ内町大字平穂3352-1
山ノ内町教育委員会

印 刷 長野市柳原2133-5
ほおずき書籍株式会社

